

海圖室に行き擔當の船員に石門の位置（經度緯度）を知る爲め、海圖を見せて貰ふ。又、石門への交通の便を尋ねたが、も一つ不明であつた。然し、後刻石門位置は $25^{\circ}17'.5N$, $121^{\circ}33'.5E$ であるとの報知を受けた。

參謀本部五萬分の一の地圖が手に入れば容易に判ることだが、無いので精密なポジションが得られないのである。

船中の第一夜は次第に暮れて行く。同じ觀測行の方があつた。鹿兒島高等農林學校物理學の藤瀬四郎教授と同校學生坂上務氏であつた。藤瀬教授は日蝕を兼ねて臺灣の地質研究にお出でになるのである。それから、今治の回漕店主飯義壽氏、大阪の絹織工場御經營の吉田長祥氏、宮崎縣延岡の渡木慶雄氏も同船であることが判つた。皆、日蝕觀測のため渡臺されるのであつた。夜遅くまで雜談に過ごす。波は高く船はローリングする。（つゞく）

日蝕の友より

拜啓 先日は、わざわざ臺灣迄お出かけ下さいました節は、私共會員に色々御指導下され洵に有難く感謝致して居ります。

先生も御無事にお着の事と存じ陰ながら安心致して居ります。

待ちに待つた九月21日も、惡天候に禍ひされ、充分に觀測する事も出来ませず、残念に思ひましたが、4度ばかり（ほんの瞬間ではありますが）コロナを觀望出来、満足に思つて居ります。

一番心に残りましたのは、皆既に入る瞬間、先生のゴ1の御聲と共に起つた息づまる様なシーンで、何かドスンとしたものを感じ、あとは、何が何やらボォーとして、今思ひ出しても、夢の様です。時々、ふと、あの中學生兩君が讀み上げて居ました時計のカウントの聲が耳に甦つて來ます。

當日、撮影致しました部分蝕とプロミネンスは、あの望遠鏡を使ひ、なれないのか、不面目ながら、同封の部分蝕1枚しか出来ませんでした。御笑納下されれば幸甚と存じます。使用器械は7センチ手動屈折赤道儀。乾板はオリエンタル・プロセス、7種を口径1時に絞り、F25、 $\frac{1}{200}$ 秒で切り、フィルタ1はバートシナ。印畫紙はフジの利根。撮影時は12時17分00秒。尙當日私が觀測隊の方々を撮影致しました記念寫眞を贈呈致します。御笑納の程。

いよ々々火星も接近致しました。天氣を心配しながら待つて居ります。

地理的に恵まれた臺灣に居ります私共に、今後何かと御注文を下され、御指導と御鞭撻を賜り度お願い致します。御期待には沿ひ得る事は出来ませんでせうが、一生懸命に致すつもりです。

昭和16年十月1日

和泉三思

會員よりのたより

田 上 訪 問 記

去る十月のある日滋賀縣栗太郡桐生に、山本先生を訪問する。

東海道線草津驛にて列車を捨て、先生の住所桐生までは相當の距離がある。草津川を遡ること約1里半といったところで、向ひは近く、石山、南郷に通ずるといふ仙境。

目下先生は、天文臺の建設に没頭中、以下先生の御宅の素描である。

山本栗齋先生——先生のお庭に大きな石碑がつき立つてゐる。洵に美事な碑で庭全體の景をいやが上に添へる立派な碑である。

たどたどしい漢文の力で讀んでゐると後より先生が

「これは私のおぢいさんでしてね。僕が三高に入つてゐる頃、たしか、二年頃までは居りまして、中々、やかましい爺さんでしたよ」とニコニコしながら語られる。

石碑の文字は中々色々なことが書いてある。先生の家は代々此の地方即ち田上村の醫を業とする家柄で、栗齋先生も醫者であつた。しかし、此のお爺さんはたゞのお醫者様でなかつた。縣會議員もおやりになれば、田上村村長を二十年もやるといった政治家でもあつた。

「先生、お爺さんは中々の政治家でゐらつしやつた方ですね……」

山本博士「中々のお爺さんで、犬養毅だとか、尾崎行雄だとかと、民權の主張者でもありましてね、非常に親しかつた様です。……尙その上、俳人、歌人でもあつて……」

なる程、尙ほ行を追ふとさうした方面に於ても、大家であり、多くの門下生を持ち、景敬的であつたことも書き連ねられてある。先生の座敷に通されると、額には、巖谷一六居士の文字、「山靜日長」とかいつてゐる。

博士「こゝにゐるとこの文字が實によく、あてはまるものです……實際、山靜にして日長しですよ……」

天文臺——それから先生の目下建設中の天文臺を案内して頂く。大きな古い土藏をぶちつらぬいて天文臺が出来上つてゐる。

博士「始めこの村の大工さんに地下から24尺煉瓦をつんでくれといつたら、一體何をなさるつもりですかといつた工合で、こんな仕事は始めてでもあるので、その内に僕と一緒に色々なことをやつてもらつてゐる内に、大分僕の意圖が分つて來てくれて、この頃はこの仕事に大いに興味を持つ様になつて來